〈会　長　講　演〉

抗酸菌感染症と慢性肺アスペルギルス症

（長崎大学理事・副学長）　河野　茂

会長講演

抗酸菌感染症と慢性肺アスペルギルス症

河野　茂（長崎大学理事・副学長）

第二次世界大戦後、わが国の結核罹患率は順調に低下したが、1997年に逆転上昇を経験した。1999年に当時の厚生省の「結核緊急事態宣言」による注意喚起で再び低下傾向を示し、平成25年度の新規結核患者罹患率は10万人あたり16.1までに減少したが、いまだ先進国の中では唯一の中蔓延国である。背景には高齢者の結核発症数の増加、結核患者の大都市圏への集中、医療の発展や生活習慣病の増加に伴う結核発病ハイリスク患者の増加、外国人結核患者の増加、薬剤耐性結核の出現などが考えられている。さらに近年わが国において罹患率が急増している肺Mycobacterium avium complex (MAC)症は、いまだ決定的な治療法が存在しない難治性感染症である。これらの抗酸菌感染症は経過中に空洞性病変や気管支拡張症などの既存肺構造の破壊が生じ、結果として気流障害や局所免疫の低下、罹病期間が長期に渡ることによる低栄養などを来し、細菌感染症をはじめさまざまな病原体に対する抵抗性が低下し混合感染を来すことが知られている。

一方、医療技術の進歩に伴ってかえって増加している免疫低下宿主への感染症の一つとして注目される深在性真菌症の中には、慢性肺アスペルギルス症のように、既存肺構造の破壊という局所の免疫低下が、疾患の成立に重要な役割を果たすものも含まれている。肺構造の破壊を来す疾患としては、COPDと抗酸菌感染症が我が国において重要であり、抗酸菌感染症に合併した深在性真菌症は一般的に予後不良であることを考慮すると、まずは深在性真菌症の迅速かつ的確な診断と治療の選択が重要で有り、長期的には抗酸菌感染症の制圧が望まれる。しかし現段階では、高齢者結核や非結核性抗酸菌症の急増というわが国特有の抗酸菌疫学を背景に、今後、日常臨床において抗酸菌感染症と慢性肺アスペルギルス症の合併例に遭遇する頻度は増加し、その臨床的重要性はさらに高まるものと推察される。

私たちが今すぐにできることは、真菌感染症の適切な診断・治療と現在の段階で言及できる範囲であるが感染予防であり、本講演では、抗酸菌感染症と慢性肺アスペルギルス症の合併に焦点をあて、その病態と昨年改訂された深在性真菌症の診断・治療ガイドラインに基づいた治療戦略、および今後の課題について考えてみたい。